

スーフィズム／タリーカ研究の課題と展望

東長 靖*

京都は今朝雪が降りました。それで吉野弘に「雪の日に」という詩があるのを思い出しました。雪が降り続けるのを見て、私たちはただ単に美しいと思いますが、詩人はそこに別のものを見るのですね。彼は、なぜ雪は降り続けるのか、と考えます。雪というのは元来美しい純粋なものとして空の高みで作られたのに、それが地面に落ちて人に踏まれて汚れてゆくわけですね。そのことが耐えられない。その汚れを隠そうとしてまた上から綺麗なものを降らせ続けなければいけない。これはもう止まれないのだ、降り続くしかないのだ、という詩なのですね。それは生きていくことのある種の性^{さが}と哀しみのようなものを秘めています。しかし逆にいえば、そういう風に誠実に、ある種^{かたく}頑ななまでに何かをし続けるということが、生きるということなのかもしれません。

さて、私共のセンターが目指す所はセンター長から申し上げたとおりですけれども、研究対象は国際組織ということで、具体的には5つのユニットに分かれております。全て国際組織ですが、最初のユニット1というのが政府系の国際組織、例えば OIC とかラービタだとかです。ユニット2がやりますのが穏健な中道派の組織、例えばイフワーン・ムスリミンとか、これからお話しいただきます山根先生のご専門でもありますジャマーアテ・イスラミーとかがこのジャンルに入ります。ユニット3が所謂急進派の国際組織、アル＝カーイダをはじめとするものです。そしてユニット4というのが私の率いております広域タリーカというものです。これに関しては後でお話をいたします。そして最後のユニット5はイスラーム銀行をはじめとするイスラーム金融を扱う。このような5つ柱で国際組織の研究を進めていこうというわけです。

1. 歴史を振り返って

1) 四半世紀の星霜

私自身は、元々小学校高学年ぐらいから神秘主義の好きな子で、今にして思うとどんな子供だったのだらうと思うのですが、荘子とか老子とかを読んで感動していたのですね。後になって、スーフィズム研究をやるようになったわけですが、そこに至るまでの歴史を振り返って、少しお話ししてみたいと思います。元々神秘主義をやりたいと思っていて、大学に入るときも私自身は本当は中国哲学をやろう、老荘思想をやろうと思っていたのですが、やっているうちにもっと色々なものに関心が出てきました。その頃に、それまでテヘランで教鞭をとってらした井筒俊彦先生が、イラン革命のためにいられなくなって日本に帰ってこられた。ちょうどその時に私は東京にいたのですね。79年でした。井筒先生が帰ってこられて、当時新しくできたばかりの岩波ホールのこけら落しの講演会に行きました。ただその時は、話の内容が全く訳がわからなくて、寝てしまいました。「イスラーム哲学の原点」という講演タイトルで2回連続だったのですが、このうちの第2回目（これにはもう行かなかったのですが）に神秘主義の話がたくさんあって、しかも世界中の様々な神秘主

* 京都大学イスラーム地域研究センター副センター長
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

義を「井筒東洋学」という形で統合して取りまとめるというようなものだったのです。私が大学に入った一年生の時に、講演を元にした本が岩波新書の黄版で生協に並んでいまして、ああ、あの時寝てしまったものだと思って手にとったところ、これが感動に打ち震える素晴らしい作品で、これを契機にして私はこの道に入ってしまったのです。そうこうしている内に、およそ四半世紀が過ぎてしまっています。

当時の日本のイスラーム研究の現状は、私の専門で言えば、ウラマー対スーフィーというような図式——ウラマーというのはイスラームの法を中心とする外面的学問を行う学者ですね、スーフィーはイスラーム神秘主義者と俗に訳されていて、人間の心の内面を扱う——この両者が対蹠的な関係にある、対立しているんだというような図式が、まだまだ平気で語られていた時代です。もう今はこのような事を言う人はほとんどいません。「ウラマー対スーフィー」などということが、時代も空間も限定しないで言えるなどと思っている研究者は、少なくとも日本にはまずいないと思います。この図式は恐らくは、(前近代にもそのような現象は一部にありましたが) 近代になってよりはっきりと現れるようになった局所的な現象を一般化して生まれた言説だと思うのですが、そのようなものがまだまだ常識で語られていた時代でした。その時にまたウラマーとして当時人々が思い描いていた——一般の人もそうですし、イスラーム研究者もそうだったと思うのですが——ウラマーというと、イブン・タイミーヤだ、ムハンマド・イブン・アブドゥルワッハブだというように、いわゆる後の「イスラーム原理主義」の流れに連なるような人々で、このような人々がウラマーの代表だと思われていた。そして彼らに批判されている側にスーフィズムだとかタリーカだとか聖者信仰などがあって、だからその流れはイスラームの中では傍流なのだ、というような図式がある種成り立っていたように思います。こういう、言ってみれば逆風の時代にスーフィズムの研究を始めたのです。とても肩身の狭かったことを覚えています。自分としては神秘主義がやりたいと思っていたのですが、多分中国哲学に行ったら相当王道ですね、儒教には負けるかもしれませんが老荘思想というのは王道だと思うのですが、如何せんイスラーム研究では神秘主義研究というのは肩身の狭い思いをするものだなと思って研究を始めた記憶があります。その当時イスラーム学研究室という所にてとても心細く、宗教学の先生の所へ行って「学問的な張り合いが無いんです」というような話をしたら、自分の所ではキリスト教の神秘主義とかの発表もあるからと誘われて研究会に出たりして少し心を慰めたりしていました。その当時私は井筒先生の強い影響を受けていたので、比較神秘主義のようなものをやりたかったのです。例えばキリスト教だとか仏教だとかの神秘主義のところだけを取り出してそれを比較したり、もしできるならそれを再統合して自分なりの思想を作りたいというような思いがありました。

さて留学ということになった時、私が最初行きたいと思ったのはフランスでした。フランスに行って比較神秘思想をやりたいと先生に言ったのですが、一蹴されまして現地に行けと言われました。もちろん私はその時に相当悩みまして、私のやりたい事と違うじゃないかと色々な先輩に相談しました。ヨーロッパへ行った人、アメリカへ行った人にも相談しましたし、現地で研究した人にも相談しました。その中に今は東大で教鞭をとっていらっしゃる杉田英明先生、私より少しだけ先輩ですが当時カイロから帰ってこられたばかりの方もおられました。今となってはまさに比較文学の大家ですね。漢文もアラビア語もペルシア語、ギリシャ語、ラテン語、何もかも一次資料で読んで比較するというとても素晴らしい研究をしていらっしゃると思いますが、あの人がカイロ大から帰ってこられたばかりで、「僕も君みたいな研究をやりたいと思っているのだけど、エジプトに行くととても良かった」というようなことを言っていたら、それも一つ背中を押してくれた事で、エ

ジプトに行く事になりました。

そのエジプトで私は初めてイスラームに目覚めたのです。ここで初めて、イスラームって面白いと思うようになりました。といっても、最初からイスラームそのものが面白いと思ったわけではなく、エジプト人が面白いと思って、面白いと言うと失礼ですが、エジプト人の人柄に惹かれたのが始まりです。こういう素敵な人達の考えているもの、感じているものを知りたいと思うようになったことから、彼らが信じているもの、彼らが日々実践している、その中に生きているイスラームというものがだんだん視野の中に入ってきたのです。私は異質なもの、理解できないものという思いをもってそれまでイスラームをやってきたわけですが、こんなに素敵な人々が当たり前だと思って、生きているイスラームというものを理解できないはずがないと思うようになりました。そこで一生懸命に、ではどうすれば理解できるのだらうと思って、主体的にイスラームというものを何とか理解しようと思い始めたわけです。その辺りからだんだんイスラームが面白くなってきて、留学中、27歳か28歳の時に遅ればせながら、ようやくイスラーム研究に一生を捧げていいなと思うようになりました。それまでは修論を書いて博士に行く時も、博士に入れてもらえなければ辞めて他へ学士入学しようとか思っていました。当時私はインド哲学に移ろうかと思っていたのですが、そうすればここに南アジアの教員として来ていたかもしれません。

さて、私はずっと神秘主義に関心をもっていましたので、留学に行く前は、イスラーム思想のなかでも例えば法だとか所謂イスラーム原理主義だとかには関心がなく、それよりはむしろキリスト教神秘主義とか仏教の中観とか唯識とかというようなものとどのように思想的に関係があるのかということが最初はやりたかったのです。ところが留学している内にだんだんそうではなく、イスラームの中で、例えばイスラーム法とどう関係しているのか、イスラーム世界に生きているイスラーム知識人の頭の中でどのようにスーフィズムが位置付けられているのかというようなことに関心が移ってきたのです。それが更に広がりまして、知識人だけでなくもっと民衆への広がりのようなものを考えないといけない、と思うようになりました。特に後で申し上げますが、私の専門の神秘主義においては、本当の事を言うと文字は関係ないというか、文字はむしろ邪魔になる可能性があるわけです。神秘的な悟りを得るためには文字とか知識とか論理とかがない方が幸せかもしれない。こういったわけで、知識人以外も私の視野に入ってくるようになりました。

2) 10年の歴史

次に、私たちが過去10年間やってきた共同研究についてお話ししたいと思います。今回も、上智大学拠点(SIAS)で赤堀先生という私の古い友人がやっているグループ3と連携して研究を進めています。こういう共同研究をもう10年やってきた。この研究会では、スーフィズムとタリーカに加えて、聖者信仰、それからサイイド／シャリーフ(預言者ムハンマドの子孫)という4つの研究トピックを設定しています。そこでは、思想研究と歴史学と人類学の研究者が主として異種格闘技をやっているのですが、これだけでも言葉が通じなくて大変なのです。この10年の内9年間は、京大のASAFAS(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)にいるわけですが、ここはもっと広くて自然科学も入っていますし、これまで聞いたこともないような言葉を操る人たちと一緒に仕事をするわけです。それはやはりとても疲れますし、でもとても面白い、その両方があるわけです。その両方が常にあるわけで、どちらに思うかは……体調によりますね。体調の良い時はとても面白いし、正直に申しまして辛いなという時もあります。しかしともかく、寄席で言えば落語ばかり続くのではなく、間に漫才が入ったり手品が入ったりして、色々なものを楽しめて刺激を与え合うような研究環境に過去10年近く身を置いてきたわけです。

これまでの共同研究の成果

Workshops and Conferences:

1. International Workshop “Ziyāra: Ethno-Historical Study of Muslim Visitation to Religious Places” (Tokyo, 2000).
2. Panel “Sufis and Saints among the People in Muslim Societies” in the International Symposium on *The Dynamics of Muslim Societies* (Tokyo, 2001).
3. Panel “Sufi Saints and Non-Sufi Saints: Sacredness, Symbolism and Solidarity” in The First World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES, Mainz, 2002).
4. シンポジウム「歴史のなかのスーフィズム」九大史学会 (2003 年 12 月)
5. Panel “Sufism and Tariqa Movements in the Era of Islamic Resurgence” in the International Workshop on *Changing Knowledge and Authority in Islam* (Tokyo, 2004).
6. Panel “The Logic of Succession among the Sufism and Saints” in The Second World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES-2, Amman, 2006).

Publications

1. Special Issue “Towards New Perspectives on Studies of Sufis, Saints and Sayyid/Sharifs,” *The Journal of Sophia Asian Studies*, 22 (2004).
2. 赤堀雅幸・東長靖・堀川徹編『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会, 2005 年。
3. Special Issue “Sufism and Tariqa Movements in the Era of Islamic Resurgence,” *Annals of the Japan Association for Middle East Studies*, 21-2 (2006).
4. Special Issue “The Succession of Sanctity,” *Orient*, 42 (2007).
5. Special Issue “Tariqa’s Cohesional Power and the Succession of Shaykhship,” *Asian and African Area Studies*, 7-1 (2007, forthcoming).

この私共と一緒にやってきた 10 年の歴史の中で、国際ワークショップと国内ワークショップを合わせて 6 つやってきています。97 年度からこのプロジェクトは始まったのですが、99 年度にやったのが最初のワークショップで、その後ほぼ毎年のようにやってきました。それから刊行されたものとしては 2004 年の英文特集が最初で、始まってから最初の成果が出るまでに 7 年かかったのは、さすがに異種格闘技をやっているんで成果にこぎつけるまで大分かったということです。こちらはもうすぐ出るものを含めて 5 点ぐらいあります。ワークショップも成果刊行も、それぞれ一つを除くと全部英語ですので、我々は実は日本ではほとんど知られていないのではないかとという危惧も少しあるのですが、海外ではそれなりに認知してもらっていると思っています。

2. スーフィズム・タリーカ・聖者信仰・サイド／シャリーフ複合

次に、我々がこの 10 年間やってきたものは何なのか、あるいはこれからこの KIAS のユニットの中でやっていきたいものは何なのかを申します。

ここで、スーフィズム・タリーカ・聖者信仰・サイド／シャリーフ複合と長ったらしい言葉を挙げましたが、これは元来は上智大学の赤堀さんがスーフィズム・聖者信仰複合現象という言葉で科研の申請の時に作り出しまして、面白いとそこへ私がタリーカを足して、さらにそれにサイド／シャリーフも足してこのような形になりました。どういうことかと言いますと、これら 4 つはそれぞれに関係を持ちつつ重なり合っているのだが、他方ずれているところもある。だからこれら 4 者をあらかじめ一括りのものとして理解しないで、作業仮説として別個のものとしたうえで、それらがどういう風に複合しているのかをきちんと検証しよう、という提唱なのです。スーフィズムは普通「イスラーム神秘主義」と呼ばれていて、そのイスラーム神秘主義において悟りための修行をしている人の集まりがタリーカ、スーフィー教団と呼ばれています。その悟りの境地まで達した人が聖者と言われていて、他方そのように修行しないでも、ある種の尊い血筋だから元々聖者になるような資格を持っているような預言者ムハンマドの子孫をサイド／シャリーフというように呼ぶわけです。この 4 つが何となくグラデーションのように連なっている、そのようなものとして学問領域としてはあるのです。

これら4つは従来、それぞれ別々に研究されてきました。スーフィズムについては我々思想研究者がずっと「イスラーム神秘主義」という名前の許に研究をしてきました。タリーカについては、前近代については主に歴史学者が、ワクフと呼ばれる経済的基盤、寄進財との関係や、あるいは政治権力とどのように関わっていたか、あるいはイスラームの改宗にあたってタリーカがどのような役割を果たしたかというようなことに関して様々な研究をしてきました。近現代について言うと人類学者が色々な所のタリーカに実際に入り込んで研究するというをやっています。第3の聖者信仰についてはほぼ人類学の独壇場と言ってもよいと思います。イスラーム世界の各地で行われている聖者信仰について分析を行ってきました。この際、基層文化論というか、イスラーム以前の元々あった文化がどのように聖者の名前を借りて現れているというような説明、つまりイスラームの内面的な視点ではなく外から切り取る視点で分析するという事が非常にしばしば行われてきました。サイド／シャリーフ論というのはごく最近提唱されたもので、東大の森本一夫さんという方が提唱しているものでまだまだ数年の歴史しかありませんが、預言者の子孫というものを特に取り上げて論じる興味深い研究で私たちも今4本目の柱にしています。

この4つにあえてキャッチコピーのようなものをつけて、一言ずつで言ってみますと、まずスーフィズムは「イスラームのひとつの核としてのスーフィズム」。もちろんイスラーム法（戒律としてのイスラーム）が一番の核ですが、それと並ぶもう一つの核としてスーフィズムのある、楕円形のような形でイスラームを描くことができるだろう。タリーカについては、「ムハンマドのウンマの現前としてのタリーカ」。初期イスラームにおいては、ムハンマドの強い存在感を感じながらそのそばにいた人々がおり、これがイスラーム共同体、ウンマの原型となります。そのウンマが時空を越えて今私の目の前に、このシャイフ（師匠）を中心としてこの場に現前しているのだという感覚を抱かせる場としてのタリーカというものがあると考えることができる。3番目は「民衆の願望の結晶としての聖者」。聖者というのは色々な奇跡といつも結びついており、奇跡を求める民衆の願望というものは常にあります。そのような願望の結晶としての聖者。それから「生ける聖遺物としてのサイド／シャリーフ」。イスラーム世界ではムハンマドの歯や髪の毛、彼が着ていた服などが聖遺物として遺されています。サイド／シャリーフ自身はモノではありませんが、例えば預言者の子孫の体に触ることによって、ちょうど預言者の着ていた服に触る時に得られるのと同じような恩寵が自分にもたらされるというような信仰が、現代に至るまであります。言ってみれば、生きている聖遺物であるわけです。

3. 学際研究・超域研究の難しさと楽しさ

すでに述べましたように、このプロジェクトでも学際研究、あるいは地域間研究をしていくわけですが、この難しさと楽しさについて次にお話ししたいと思います。まずは皆さんも学際研究をなさっていてお気づきだろうと思いますが、とにかく簡単ではありません。そんなに簡単に学際研究ができるのなら、そもそもディシプリン教育は何なのだということになりますね。ディシプリンというのは身に付けるのにとっても時間がかかる訳で、それを身につけたうえで、学際ですからそれを越えて両方を跨ごうとするわけです。それは容易なことではありません、言うは易く行方は難し、とても一筋縄で行くことではない。

例えば文献学とフィールドワークの間について。私自身は文献学をそもそものディシプリンとして育ちました。例えば最近、私は毎年、夏も冬もトルコに行っておりませんが、トルコではイスラーム研究センターという所に籠っています。あるいはもっと写本を持っている写本館に籠る事もあり

ます。朝9時に行って1時まで勉強して、敷地の中にある食堂にお昼ご飯を食べに行き、またずっと勉強をして、疲れてくるとこれも敷地の中にある無料の茶店でお茶を飲んで、夜の9時までやって、「ああ、良かった」と帰ってくる。このような暮らしがとてもうれいなのですね。これが文献学をやっている人間の醍醐味なんです。恐らくフィールドワーカーの方は、何が面白いんだと思われると思います。逆に言うと、僕は昔エジプトに留学していた時にホームステイをしていたのですが、ホームステイをしていると当然お客さんが頻繁に来るわけです。大家さん（お父さん・お母さんと呼んでいたんですが）のお姉さんとその娘達とか、その娘達の婚約者とかが来るわけです。僕は一室もらっていてその部屋には入ってこないのですが、居候たるものここで出て行かないといけないうらさうと思て、出て行って「こんにちわ、日本からきたヤスシと言います」とか言っていました。まだ慣れない、アラビア語も大してできない頃に、一生懸命出て行って話をし、こういふ話し方をするんだとか、こういふ時はこのよなボディランゲージをするんだとか、一生懸命見ているのです。最初のうちはとても面白いのですが、本の虫にとっては、これがずっと重なると段々疲れてくるのです。毎回人が来るたびに出て行かなければならない、多分フィールドワーカーの皆さんはそういふ時に自分からどんでん行くんたろうと思います。これは正直に言うに私にはとてもつらい、今は半分フィールドワーカーでもありますのでやっていますが、しかし喜んでやっているとより、やらなきやと思てやっています。恐らく向き不向きというのがあるんだらうと思います。文献学もフィールドワークも両方ともすごく喜んでやっていると人は、相当すごい力量の持ち主だと思わけてです。

それから思想と実態のあいだについて、私のやっているスーフィズム・タリーカ研究を例に申し上げたいと思います。スーフィズムを普通は「イスラーム神秘主義」と訳す、と申しましたが、神秘主義という言葉が一般の方にはあまりよく分らないうえに、どうも普通の生活から離れたイメージを与えるらしい。そのイメージの一つは、とてもオカルト的なもの。それこそオウム真理教と選ぶところがないよな、とても怪しげなものとして神秘主義という言葉が理解されるらしい。もう一方では、神秘主義というと哲学科とか宗教哲学でやるよな、何かとっても難しい、わけのわからないやつですよねというよな反応もあるのです。いずれにしても一番低い所か一番高い所か、どちらで理解されているよな。つまり、人々のイメージのなかでは、我々日常の人間が普通に生きている時に関わらなくてよいところに「神秘主義」は置かれているよな。イスラームにおけるスーフィズムは、そうではありません。純粹に形而上学的な側面も、相当怪しげな側面もたしかに含みこんでいますけれど、もっと日常的な、ふつうのムスリムたちが生きていく真っ只中にスーフィズムは寄り添ってきたわけです。今までの思想研究はこの一番上の形而上学的な部分だけを切り取って研究していたよなと思います。私のやっている存在一性論などはわくわくするよな知的好奇心を呼び覚ますものですが、とても難解なもので、一般の人々が誰でも読んで面白いと思わうよなものではありません。他方、おまじないのよな、病気を治すのに唾を吐きかけて治すよな営みも、スーフィズムやタリーカ、聖者と関係づけられてイスラーム世界のあちこちで行われてきています。これだけの広がりやスーフィズムやタリーカは持っているわけ、そこを何とか一つのものとして、つまり上流から下流までを全体として理解したいのだけれど、それは容易ではない。自分自身を学問の垣塙にして、様々なレベルの様々な事象を様々な方法論を用いて分析するといふことは我々地域研究者の理想だと思わうのですが、とても難しいことです。恐らくそこで、次善の策として共同研究といふのがあるのだと思わう。それぞれの専門、持ち場、立場といふものがありつつ、皆でお互いの溝を埋めていくといふ試みがあるのです。

個人研究と共同研究のあいだという問題もあると思います。我々はこのセンターでは当然共同研究を推進していくわけです。ですから今日の話も共同研究ということに軸足を置いて話していますが、やはり我々は一人一人が研究者ですから、しかも我々人文社会系の人間は連名で論文を書くわけでもありませんから、やはり自分自身の研究がどれだけしっかりしているのかが全ての基礎だと思います。自分が本当に専門にしている、自分自身が本当に面白い、知りたいと思っていることについて、私なら文献に基づいて、フィールドワーカーならフィールドの実際の現場に基づいて、どれだけちゃんとしたことが語れるかというのが、恐らくこのセンターを支えていく一番根本のところにあるのだと思います。

4. スーフィズム研究

それではこのセンターでは、どういう研究をしていきたいのか。時間の関係もございますので色々な事があるのだということをざっとご紹介したいと思います。例えばスーフィズムについて申しますと、思想研究としては、存在論（宇宙論）、修行が進むにつれ人間の魂がどのように変容していくのかという靈魂論、修行論、聖者論、ズフド（禁欲主義）研究、イスラーム諸学との関係、シーア派との関係、などのテーマが挙げられます。これらの内、修行論研究については、ある思想家がこのような修行論を書いているというような研究書は確かに結構あります。しかし、タリーカの実践と結びつけた修行論の研究はあまりないのです。具体的にこの教団がこのような修行をしていて、その時のマニュアルはどんなものだったのか、それが思想とどう結びついているか、或いは一方でタリーカの運営とどう結びついているか、組織とどう結びついているのかといった研究は、案外なされていません。その辺りは是非やっていきたいと思います。それから聖者論についてはスーフィズムだけが聖者の正しさを裏打ちしているわけではないということがもっと考えられるべきでしょう。スーフィズムの前段階になったズフドと呼ばれる禁欲主義段階の研究もまだ手が付いていないので誰かがしっかりやると良いなと思っています。イスラーム諸学との関係についていえば、タフスィール（クルアーン解釈学）とか、法学・神学との関係についてもしっかりやるべきだろうと思います。シーア派との関係というのも興味深いテーマですが、実はまだ何ほども明らかになっていない。

それから難しいのですが神秘主義詩についての研究があります。とても読むのが大変で、しかも読めたからといって、文学研究にはなるかもしれないけれど、思想としてそこから何を読み取のかとなると相当難しいもので、なかなか使えないのです。例えば歴史学者の方も詩のところは飛ばして読む傾向があるらしくて、実は多くの年代記に詩が出てくるのですが、詩のところはとても読みにくくて、普段の倍ぐらい時間をかけて読むのだけど、そこから何の史実が出てくるのかというと、大抵の場合は出てこないのです。だから史実だけをやる歴史学であればそこは飛ばして、どんどん読んでしまうこともあるようですが、その年代記を書いた人たちは当然必要だと思ってそこに詩をいれているわけです。だからそこを飛ばして読んで本当に対象をちゃんと理解しているのかということは当然問題になるわけで、同じようなことが我々のスーフィズム研究にもあります。

それから思想と運動の問題についてですが、上に述べました存在一性論の神秘主義学派に属する人々に、アミール・アブドゥルカーディルやホメイニーという人々がいます。前者はアルジェリアの反仏闘争を率いた人、後者は皆さんご存知のとおり、イラン革命の立役者です。きわめて形而上学的な存在一性論についての著作をもっているこういう哲人たちが、一方で武力闘争をやって政治参加する。このあいだをどういう風に理解すればいいのだろうか。

タバカート（列伝）研究もまだまだなされるべき領域だと思っています。思想研究の立場からは、そこから史実を再構成するよりはむしろ、編纂者自身がタバカートという形にこめた意図は何だったのか、それを編纂者の時代精神と照らし合わせながら考え直してみたい。

民衆の祈禱句や歌の研究もまだこれからの領域です。文字も読めないような民衆が、意味も分からず祈禱句を唱えたり宗教歌を歌ったりする。東南アジアやサハラ以南アフリカなどでも、その言葉がアラビア語であることはまああるんです。クルアーンぐらいのものはもちろん知っているにしても、そうでないものをなんだか分からないが唱えている。日本でいえば、真言なんてのはほとんど意味が分からないけれども、信者の人なら言えてしまうということがありますね。あのようなものがイスラーム世界にも実際に起こっているわけです。例えば存在一性論を唱えたイブン・アラビーの思想はとても深遠なのですが、そのようなものをサハラ以南アフリカの人が普通の集会で読んでいたりするのです。全く意味も分からず、何か呪文として読んでいたりするのだと思いますが、こういう現象の研究も既に少しですが現れ始めています。

欧米のスーフィズム・タリーカも面白いテーマです。欧米では実はスーフィズム・タリーカは相当の隆盛をみせていて、いろんなトレンドを見て取ることができますが、その中には、イスラーム教徒にならなくてもスーフィーになれると説くような動きもあります。普遍的な神秘主義をスーフィズムというものを通して目指せるのだという動きとってよいでしょう。日本人にとって、こういう発想が出てくるのはあまり違和感がないかもしれませんが、たとえばアラブ諸国でこういう発想にはまず出会わない。世界規模で広がっているイスラーム世界の様々な側面を掘り起こすという意味でも、こういった研究は意味があるでしょう。このような色々な面白いテーマが、スーフィズム研究にはあります。

5. タリーカ研究

さてタリーカ研究の話に参りますが、これまで個別のタリーカ研究として色々なものが出されてきました。主要な教団についてはほぼ出ていますし、論集もたくさん編まれていて、特に90年代からフランスを中心にして、ラウンドテーブル形式でタリーカ研究がなされていますので、相当な蓄積が我々の手元にあります。

他方、タリーカ論ということについて申しますと、まだまだ突き詰める点があるだろうと思っています。すでに1980年に京大西南アジア史学の間野英二先生が、タリーカ研究の問題点を（1）史料と研究史、（2）系統・系譜、（3）教義、儀式、あるいは規定、（4）メンバーの社会的・政治的活動、（5）経済的基盤、（6）教団組織、という風にまとめられましたが、やはりこれが議論のスタート地点になるだろうと思います。これまで個別の情報収集はずいぶんなされてきているのですが、そのうえに立っとう少し一般化したタリーカ論というようなものを論じるべき段階にきているように思います。私たちの共同研究では、2006年の6月にヨルダンのアンマンで開かれた第2回世界中東学会大会にパネルを出して、タリーカのシャイフ位などがどういう風に継承されるのかといったことを論じましたけれど、このテーマについても、日本からこれから発信していく余地があるのではないかと考えています。

6. 広域タリーカ

さらに進んで、私たちの研究ユニットの研究テーマである広域タリーカというものについてお話をしたいと思います。広域タリーカにどのようなものがあるかは大体分かっていますけれど、それ

らが歴史的に、あるいは現代においてどのような活動をしているのかという実態解明はまさにこれからです。それをやるためにこのユニットがあるのですが、ざっと今気が付く点だけ申し上げておきます。

広域と言いましても恐らく2つの場合があります。つまり確かに地域的には広い範囲に広がっているのだけれど、実はばらばらになっていて、名前は「……系……教団」、と一応同じ、シャーズィリー系なら理論上は全部シャーズィリーというくくりに入れられるはずなんだけれど、その実態は1つではない、ばらばらになっているという場合。もう一方は中央集権的に組織化されている場合。この2つを分けて考えなければいけない。このことはたとえば京都外国語大学の堀川徹先生がすでに指摘されています。

それから前近代において、例えばナクシュバンディー教団とかティジャーニー教団が非常に組織立った動きをなしていたことが知られています。近代になると、こういう傾向はもっと強くなりますが、タリーカが中央集権的な組織をもつようになった現象を、「ネオ・スーフィズム」と呼ぶことが行われています。これは元来、思想的にそれまでとタイプが違う新しい型のスーフィズムが生まれてきたという主張に基づいて出てきたネーミングなのですが、その後思想的にはそういう新しさは必ずしも認められないということになって、むしろ組織面に限定してこの用語を用いることが多くなっています。こういったネオ・スーフィズム論を展開していく時の1つの典型例として、このような広域タリーカというものを前近代から近代までを通して検証してみることは意味があるのではないかと思います。

現代においては、2つの点で広域タリーカを考えることができます。1つはイスラーム主義グループとの関係です。所謂「イスラーム原理主義」と人々が目しているものの中に、実はタリーカが存在しています。例えば中央アジアでマスコミからイスラーム原理主義グループと呼ばれているものの多くは、ナクシュバンディー・ムジャッディディー教団が担い手であったりするわけです。ですから、それこそ教科書的な図式的な見方である、原理主義教団がタリーカを批判しているという「原理主義」対「タリーカ／スーフィズム」という図式でいえば全くおかしい現象が起こっているわけです。マスコミが原理主義といっているものは、実はそれに批判されているはずのタリーカがやっているのだということになるという現象が現実には起こっています。もう1つは欧米を含んだネットワークの広がりです。欧米を含んだ広域タリーカのネットワークというのはずいぶん広がっているのですが、北米中東学会はこれに結構注目をしている、もう何度もパネルが組まれています。このような現象に関連して、サイバー・スーフィズムということも既に語られています。

ちなみに余談ですが、環境問題とスーフィズムとの関わりなどもそのうち研究対象に入ってくるのではないかなというように少し考えていて、エコ・ツーリズムのような言葉になぞらえて、「エコ・スーフィズム」というような言葉も考えたりしています。まあこれはほとんど冗談のようなものなのですが、いちおうこの場で商標登録しておこうかなと思っています。

7. KIAS のスーフィズム／タリーカ研究の目指すもの

1) 研究テーマ

さて、最後に KIAS のスーフィズム／タリーカ研究が取り組んでいきたい研究テーマをざらっと並べてみたいと思います。

タリーカ論。これについてはすでに述べました。

スーフィズム・タリーカと原理主義の関係。これについては近現代のスーフィズム・タリーカと

いうものが原理主義とどのような関係にあるのか。実は単に重なっているというような簡単な関係ではなく、或いは単に対立しているというわけではなく、相当複雑な様相を呈しています。

聖者論と聖者信仰。思想研究が担ってきた理論研究としての聖者論研究と、イスラーム世界に実際に広汎に見られる聖者信仰の実態についての研究は、これまで別個に進められてきました。これをなんとか架橋したい。

預言者一族の問題。とくにエジプトの事例が面白いと思っています。エジプトでは、預言者一族の組合みたいなものとスーフィー教団高等評議会の間に密接な関係があるということで、これまでも認識はされてきたのですが、まだきちんと研究されたことはないように思います。ぜひこのようなものをこの機会に何とか世に問うていきたいと思っています。

ほかにも、神秘主義比較研究、古典期と近現代のあいだの中期スーフィズム研究、スーフィズム・聖者信仰・タリーカ研究各々の分析枠組みの定立とその総合、イブン・アラビー学派の継承とタリーカの系譜の関係、……といったように色々やってみたいことがあります。

2) 知のインフラ整備

この KIAS 全体のテーマでもあります知のインフラ整備に関しては、まず何よりもイスラーム世界各国のスーフィズム・タリーカ文献を収集したい。我々はやはり文献学が基本ですので、文献がないことにはどうしようもない。例えば既に我々は、アラビア語については相当の、ペルシア語、トルコ語に関してもある程度の蓄積を持っています。私自身は個人的に、オスマン・トルコ語やインドネシア語、それにスワヒリ語も少し集めています。ウルドゥー語も南アジアの先生に頑張っていたいで集めてきました。こういったものを元としつつ、もっと幅広くイスラーム世界全体に広げて収集していきたい。成果としては、近々にオスマン語のスーフィズム・タリーカ関連文献リストとイブン・アラビー学派文献リストを作成したいと思っています。

それからスーフィズムのアンソロジーですが、日本にはまだこの種のものがありませんので、日本人が生々の形でスーフィズムの息吹に触れられるようなものをぜひ作りたいと思っています。

さらにはタリーカ・データベースのようなものも考えています。タリーカ規約集の翻訳ですとか、ある都市におけるタリーカやザーウィヤ（修道場）の悉皆調査に基づく一覧リストとかいった基礎データを揃え、提供したいと思っています。そのようなことが今後の研究の基礎となると思います。このプロジェクトは拠点を作ろうとするわけですから、20年先を目指さなければいけない。そこまです視野に入れると、このようなインフラの整備はとても大事なことだと思います。

8. 場としての京大、場としての ASAFAS

最後にこのセンターが置かれる場というものに触れておきたいと思っています。思想研究をしている人間にとって、京大といえば、哲学における京都学派が花開いた場であり、神秘主義研究にとって伝統のある所です。また、文学研究科には西南アジア史学があり、タリーカ研究、タリーカ論の伝統があります。西南アジア史学からは、濱田正美先生に研究プロジェクトメンバーに加わっていたいで、一緒に研究をしていけるという幸せな状況です。

場としての ASAFAS について言えば、ASAFAS の教員・学生の研究対象は、アジア・アフリカの全域に広がっています。こういう場にセンターが設立されたという利点を活かして、中東・南アジアを中心としつつも、東南アジアからアフリカまでを一つの環として繋いだ大きなイスラーム世界というものを構想して、研究を進めていきたいと思うわけです。

冒頭に、雪の話の申し上げました。今この場において話をしている私たちも、雪の一片に過ぎない。

本人たちは一生懸命、やれる範囲で降っているつもりですが、いずれは地に落ち、消えていく運命です。しかし、雪は後から後から降り続く。真っ白な、希望と純粋さに満ちた新しい雪たちが後に続いてくれることでしょう。このセンターが、絶え間なく降り続く雪を、長い年月にわたってしっかり受け止めるような存在になればいいなと願っております。今後とも皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。